

□ ピー用紙を手にとると、水性ボールペンでサラサラと立体的な建物の絵を描く堀内粹さん（11歳、東泉丘）。堀内さんは令和2年（2020）1月に全国各地で開催された富士山をテーマとしたアート作品展「富士山展3.0ー富嶽二〇二〇景ー」に千200×千700ミリメートルのボールペン画「富士京」を出展。80人近い出展者の中から、同年2月に東京都で開催された同展のセレクション展に出展できる12人のうちの1人として選出されました。

物心がついたころから絵を描いていたという堀内さん。母親の優子さんは「私がデザイン関係の仕事をしていて、要らなくなった図面を、裏に絵が描けるかなと渡していたら、図面にも興味を持ったみたいですよ」と振り返ります。建物やまち並みなどに興味を持ち、小学生になると、実在するものや想像したものなど、さまざまな景観を描くことにのめり込みました。

毎日作品作りに没頭し続ける堀内さんが小学2年生の時に訪れた転機。それは東京大学が運営する、国内や海外で行われるプログラムを通して子どもの才能を引き出す「異才

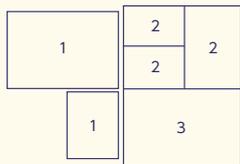
夢・きらめき 豊っ子

建築家になって

日本一の建築を

つくりたい

堀内 粹さん



- 1 ポールペン画「富士京」と一部拡大
- 2 「富士京」には、都市内の町名、ロープウエーのデザインや駅名など、堀内さんが考えた詳細な設定が盛り込まれている
- 3 現在は、想像上の都市「粋県」のまち並みなどをスケッチブックに描きためている

今年3月には、堀内さんの初めての個展「建築家になりたい僕が見る世界。」を江之子島文化芸術創造センター（大阪市西区）で開催。自分のお年玉でギャラリーを借り、グッ

「富士京」は石巻市で得た気付きや視点を盛り込み、「地球温暖化による海面上昇のため、住む場所を失った人々が富士山に暮らす」というストーリーで制作。堀内さんが得意とする景観描写に「持続可能な都市」の要素を加え、雨水タンクが設置されたビル群や、交通網として張り巡らされたロープウエーなど、建物やインフラといった都市構造を緻密に描きました。

発掘プロジェクト「ROCKET」に参加したことです。中でも、東日本大震災で津波の被害を受けた宮城県石巻市での合宿体験プログラムでは、津波の爪痕が残るまちを見学し、地元で暮らす人々との交流を通して、災害への興味を深めることに。合宿を終えてからは、気候変動や災害などをテーマにしたドキュメンタリー番組をよく見るようになり、災害や環境の変化に対応したまちの創造への意識が高まっていったようです。

取材 こぼれ話

憧れの建築家は？

アントニオ・ガウディです。スペインにあるサグラダファミリアは一度訪れてみたいです



ズとして販売したポストカード制作や会場設営、会期中の案内などを自ら行いました。「たくさんの人が作品を見に来てくれて、じかにいろんな感想がもらえたので良かったです」と、達成感が十分にあった様子です。

今は、想像上の都市「粋県」をスケッチブックに描き、地名や特産品、都市で暮らす人々の生活の様子などを考えることに夢中。次から次へと作品を見せてくれ、大人びた口調で一つ一つ丁寧に解説してくれる一方で、自身のこととなると、小学生らしいあどけなさやはにかみが見え隠れする堀内さん。「持続可能なまちづくり」という大きな夢に向かって歩みを進めています。